
中身の入った蟬の脱殻

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中身の入った蝉の脱殻

【Nコード】

N6041C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

神塚高校二年生のある生徒・・・彼が嫌いなものは悲しい話と血が出る話・・・彼は七不思議に巻き込まれていく。

始まり（前書き）

少々、初めのほうはまだコメディイのような感じがせず、中途半端怖い話になっています。そういうのが嫌いな人は読むのはやめたほうがいいかと・・・

始まり

ぬいぐるみのことを俺が親戚に尋ねたのは結構前の話だ。そのとき、尋ねた親戚は

「ぬいぐるみとはそのものの抜け殻である・・・つまり、せみの抜け殻のようなもの」と答えられて俺はその後、小学校を卒業するまでそのことを信じていた。持っていた熊のぬいぐるみの中身が真っ白な綿であることを俺は

「抜け殻の内部である空虚をうめるために存在しているもの」と認識していたし、中身の詰まっているところを見たくて俺は動物百科を買ったりしたものだ。夏にはセミの抜け殻ができる場面にも立ち会った。しかし、ぬいぐるみ関係のことは当然のように関係することなく・・・俺がそのことが嘘だったということによく気づいたとある小学校最後の思い出が過ぎて域・・・高校生となった今では、そんなことはないのだが・・・

プロローグ壱

「・・・七不思議？」

「ああ、そうだ」

俺の名前は碌名視驟雨^{ろくなしじゅう}。

「驟雨は興味ないか？」

「高校生にもなって・・・まあ、面白いなら話してくれ」

神塚高校^{じんづか}の二年生だ。

「それなら、とっておきだろうな・・・この神塚高校のとおき

だぜ？」

「何だ？」

趣味は読書。

「……学校裏に“ゴミ捨て場”と言われている大きな穴があるだろう？読書している奴なら知っているだろう？図書館の裏側だ。」

「ああ、よく見るな。あれは深さ約十メートルで五メートル四方の奴だろ？」

嫌いなものは悲しい話と血だ。

「……悲しい怪談話ならやめてほしい。あと、血が出てくるような話も駄目だ。新学年早々、一人で暗くなりたくないからな」

「そうか……それなら、やめておこう」

俺はその日、その怪談を聞いておくべきだっただろう……。なぜなら、その怪談関係のことに俺は巻き込まれてしまったからだ。別に、いやみで言っているわけではない。

「……話聞いたりして巻き込まれたりする奴か？」

「まあ、どうせ聞かなかったんだから巻き込まれることはないだろう？」

俺の友達も、誰も知らなかったのだ……

「話を聞かなかった奴が巻き込まれる……」ということ……。俺はその日、先生に呼び出されて用事を終わらせた。既に部活をしている生徒たちもちらほらと着替えて帰宅を急いでいるようだった……。今更だが、俺は昼休みに話していた友達との会話を思い出したのだった。既にその友達は帰っているのでここにはいない。

だから、今度聞けばいいだろうと思つて家に帰るために校舎を後にした。

神塚高校七不思議の一つ『蟬のなく日に訪れた悪夢』

神塚高校は昔、女学校だった。

蝉時雨が堪能できる暑い日、昔からゴミ捨て場として使用されていた場所があった。

そこで、血まみれの女学生が発見された。

発見された当初はまだ、息があつたので病院に搬送されたのがよかったのか知らないが、彼女は一命をとりとめた……。だが、その後彼女は死ぬまですつと誰とも話さなかつたそうだ。彼女が死んだのは一週間後……。そして、その彼女の幽霊と思われる時期はそれから一週間後……。そろそろ蝉時雨も終わりを迎えようという時期だった。別に何をするでもない……。というはずだったのだが、事件が起こつたのは数年が経つてその高校に男子生徒が通うようになった後だった。

ある日、一人の男子生徒がその場所を通つた。

事件が起こつたのはその日。いつかと同じように男子生徒は血まみれで発見された。屋上からの飛び降りだったそうだ。事件は表上、普通に片付けられたようだったが裏のほうではその話が蔓延していた。いつの間にか、この話を興味を持ったが聞かなかつたものだけにその幽霊が現れるようだ……。といううわさがたつたのであった。彼女はただ単に、男の友達が欲しかつたそうだ。だが、その性格上、嫌われてしまったとのことだった。

始まり（後書き）

さて、この小説では怖いながらも楽しいといった感じにしていきたいと思っています。

気づき（前書き）

第二回目・・・まだ、コメディー調ではありません。

気づき

一、

校舎をぬけると、少々そこから校庭の端のほうを通って自転車置き場が一年、二年、三年と続いていく。

その次にバイク小屋が置かれていてさらにその先に教員用駐輪場がある。

その先を抜けると東の校門となり俺の家からは遠ざかってしまうのだが教員たちはこちらのほうから安全上、出て行ってほしいようだ。何でも、西側・・・うわさの立ちこめる図書館とこの高校の資料館、そして旧図書館がその姿を見せる。

ちやうど、暗がりになったり職員室などからは死角になってしまい、そこでは俺の口からはいえないようなことがあったり、行われたりしているらしい。

まあ、俺が通っている高校にそこまで不良な奴はいないようなのでくだらないことなのだろう。もしくは、この高校は男女間について口うるさい高校だから密会があったのかもしれない。俺にはその密会する相手がひとりもないので関係ある話ではないのだがね・・・・それと、噂されているゴミ捨て場である大きな穴が関係していてただたんに危険なのかもしれない。

「・・・さ、帰るか・・・」

東を見ずに俺は危険とされている西のほうへと向かっていく。この時間帯なら夕焼けを浴びることができるのだろうが・・・残念ながら巨大な木が邪魔をしていてちやうど見るできないので暗い。

「・・・」

しゃべる相手もないのでただ単に、黙々と歩いて帰る。自転車が使えればいいのだが、あいにくこの前壊れてしまった。今は修復中で俺は毎朝、仕事に行くついでとして父親に車で近くに下ろして

もらってそこから通っている。帰りは電話をしてもかまわないといっているがそこまでの距離ではないので健康のために徒歩で家に向かっている。

「……………」

最近、俺はこの世界に対して微妙に不安を感じている。ちょっと、おかしいのではないかと思っているのかもしれない。それが、正しくない、正しいというのはどうだろうかと思うのだが……まあ、そんなことはどうでもいい。

そんなたわごとを考えながら歩いて約五分が経っただろうか？一定歩数で歩いていた俺は大きなゴミ捨て場に差し掛かる。

「……………」

俺は一瞥することもなく、その隣を歩いていく。視界の端にちらりとだけ黄色と黒の危険を示すであろう、ロープがはいったが、それ以外は何も見る事ができなかった。

だが、俺の耳には異常な音が聞こえてきていた。

ガチャリ……

例えるなら……鍵を開けたときの音。周りには確かに建物があるが、そのような音がしたことなど一度も聞いたことがない。この時間帯に鍵をかける人はまだいないはずだ。

「……………」

振り返ってももしかしたら非日常に飛び込むか、このまま歩いて帰って明日の勉強をするか……

俺はその前者……絶対にどちらかしか選ぶことができないであろう選択肢二つのうち、一つを……選んだ。後悔がなかったとはそのときは思っていない。後悔というものは後から悔やむことだ。

そこにはこの高校の昔の制服を着た黒髪の少女が立っていた……血まみれで……

「……………」

俺は尻が濡れていることに気がついた。いや、失禁してしまったわけでもなく・・・ただ単に、湿った地面に腰が抜けてしりもちをついていただけだったということだ。いや、誰だって目の前に血だらけの女子生徒がいたら目を疑う前に自分の正気を確認するだろう。だが、俺の場合は昼休み話していた怪談話を思い出していた。

「・・・」

何かを発することなく、彼女は俺に一步近づいてきた。俺はしりもちをついたまま、一步下がる。

ゴフツ・・・

彼女は一步步くごとに口から血を吐いた。

「・・・ひい・・・」

情けない悲鳴が俺の口から出てくる。だが、今はそんなことを言っている場合ではないことはわかっていた。別に彼女に恐怖したわけではなく、いきなり吐血したことに驚いたのだ。いや、血だらけの彼女を見ても恐怖していない自分の神経がおかしいということに気がついたほうがいいのかもしれない。

また一步、彼女は近づいてきた。俺は二歩、下がる。こうしていけば、離れることができるに違いないと思った俺だったのだが・・・血だらけの彼女は血を撒き散らせながら俺の目の前で倒れた。

「・・・きゆう・・・きゅ・・・うしゃ・・・呼んで・・・ください・・・」

俺の耳に蒼聞こえるようにだけ言って彼女は動かなくなった。

「え・・・あ・・・」

パニックしている俺の頭の中では

「今までおばけだった存在」は

「怪我をしているこの高校の生徒」という感じに変わった。携帯を取り出し、あわてて救急車を呼ぶ。

その後、俺は警察に事情聴取をされていた。まあ、当然のことだ

ろっ。

「・・・ようやく、開放されたかあ・・・」

そろそろ面会時間が終了を迎える時間帯ということで俺は病院の中に入ろうとして・・・先ほどの血だらけ娘が頭に包帯を巻くこともなく、俺の目の前に姿を現していたのだった。

聞いた話では、外傷はまったくなかったそうで・・・健康体だそう
だ。

しかし、体についていた血は間違いなく誰かの血だったそうだ。

彼女がいたと思われる大きなゴミ捨て場付近には俺が気がつくことのなかった赤色の水溜りができていたらしく・・・その量は人間が死んでしまう量を超えてしまっていたらしい。とりあえず、どこかで人が死んだのだろうということ警察たちがああ付近を搜索しているそうだ。まあ、俺には関係の話だろう・・・とりあえず、今は目の前にたっている少女についてどうかしたほうがいいだろう。

「・・・」

目の前の少女は何も話さないし、俺をじっと見ているだけだ。そうされても俺が何かしたほうがいいというわけでもないのだが・・・そうだ、そういうえば、彼女は一人暮らしだったということだった。他にも情報をもらったしとりあえず、何か話したほうがいいに違いない。

「えっと、瀬見津夏華さんだね？」
せみづなつか

「・・・」

警戒をしているのだろうか？あからさまに俺に対してあまりいい視線を送ってこない。その目は間違いなく、俺を怖がっていた。

「・・・私を怖がりましたね？」

どうやら、俺が彼女を見つけたときのことを言っているようだ。

つまり、彼女はその理由で俺に対して恐怖しているようだった。まあ、考えようによっては自分が大怪我をしているような状態（いや、彼女の場合は怪我をしていなかったが。）で誰かに助けを求めたのだが、その相手は自分を化け物だと思っていた・・・ということだ

ろう。彼女は誤解しているようだ。

「・・・いや、君を怖がったんじゃないくて、いきなり・・・君が血を吐いたことに驚いたんだ。俺、ちよっと血を見るのが苦手で・・・」

これは事実だ。大量の血が出る何かを見てしまうと貧血を起こして倒れてしまう。過去にも、自分の血を抜いただけで顔が真っ青になり・・・そのまま病院行きになってしまったこともある。

「・・・本当でしょうか？あれだけの理由で私にあのような目を向けたりしないと思いますけど？」

一陣の風が吹き、俺と彼女の間に割ってはいる。その風で彼女の長い黒髪がぱつと広がって再び落ち着く。その目に浮かぶ色は疑惑・・・つまり、俺の説得は失敗ということだ。結構きれいだっただからお近づきになろうと思ったのだが・・・半分本当半分嘘のことを言っても信じてもらえないなら本当のことを言うしかないのだろう。

「本当の話、俺・・・昼休みにこの学校の七不思議のとおき友達から聞こうとしたんだ。それで、ちょうど・・・夏華さんが倒れていた付近にその話していた大きな穴があったんだ。だから、てつきり・・・その七不思議に出てくるお化けだと思ったんだ」

「七不思議・・・？でも、それはその内容とちよっと違う・・・」

「ああ、俺は実際には聞いていないんだ。悲しい話だってそいつから聞いたからね・・・」

「・・・」

唐突に押し黙り、俺を見てくる。彼女の目は奥のほうをよく見れば琥珀色をしていた。血だらけとなっていた昔の制服はなくなっており、新しい制服を着ている。

「・・・そういえば、命の恩人の名前を聞いてなかったわ・・・名前、教えてくれない？」

「俺？俺は・・・碌名視驟雨」

「・・・驟雨・・・なるほど・・・それなら・・・」

彼女が何かを言おうとすると彼女の後ろから誰かの声が聞こえてくる。

「……すみません、もうここ閉じますので面会の方ならそろそろ帰ってもらえませんか？既に面会時間が終わっていますので……」
看護師さんがそういつて俺たちをせかす。

「あ、すみません……」

俺たち二人は病院の外に出たのであった。

「……これから、私の家に来る？」

「……いや、いいよ……俺も家に帰って両親に話さないといけ
ないし……」

そういつと彼女は少しだけ悲しそうな顔をした。失礼だが、彼女は悲しそうな顔をしていると儚げな印象もあいまってより、美しくなる。

「……どうしたの？」

見とれていたのだろう……ぼさつとしていたのが悪いのだろう……

・俺はいつの間にか目の前に立っていた彼女に驚いて後ずさる。

「……びつくりした！」

「え、ああ……ごめん」

彼女にはまったく非がないのだが……彼女は俺に謝った。

「……え、いいよ……」

「そう？それよりさ……今度、私の家に来てくれませんか？」

「えーと、何で？」

不謹慎なのだが、俺は彼女がいないのでそういつことをいわれるとどきりとしてしまう。

「……私、友達でにくいんです。元々、根暗な性格だし……私
が血だらけだと連絡してくれたのが同じ高校の生徒でよかったです
よ」

そういつて本当に

「よかったあ」といつ顔をする夏華さん……

「じゃ、じゃあ……今度お邪魔させてもらつよ」

俺はそういつて彼女と別れた。彼女の微笑む仕草を見ながら俺は

彼女が血だらけであったことに感謝した。まあ、そのときは別に・
・そう、別に彼女がおかしい人だと一ミリも思わなかった。
しかし、世の中陰険なものであると気がついたのは彼女の家に向
かう途中だった。

変わる（前書き）

読んで感想なんかいただけるとうれしいです。

変わる

二、

「……夏華？」

隣にはあの七不思議のことを俺に話そうとして結局話すことなかった友人がいる。今、彼の目には不思議そうなものを見ている気がする。

「……知らないのか？ 瀬見津夏華……この高校にいるだろう？」
「瀬見津……いたっけ？」

その友人は俺の話しに首を傾げながら考え込んでいたようだった。まあ、夏華さんのことは今はどうでもいいや。

「……いや、それならいいんだ。それより、七不思議のとおきを聞かせてほしいんだけど？」

「ああそれな……」

少しだけ気まずそうな顔を俺に向けてくる友人。

「……ちよっと、ど忘れしちゃった」

「そうか、それならいいや」

別に忘れたのならどうでもいいだろう……そういつて俺はその話を聞くことなく、夏華さんの住んでいる家へと向かったのだった……正直、話を聞いていれば間違いなく俺は彼女の家に行くことなかったのかもしれない。

「……ここで合っているよな？」

目の前に建っているのはこの町で一番おかしいというくらい大きな屋敷だった。俺だったら屋敷といわれたら洋風の家を想像するのだが……彼女、瀬見津夏華さんの家は日本風で趣のある家だった。家の門の隣に石灯籠が置かれてある。扉の端のほうにはセミのマークが彫つてある。

「……チャイムもないようだけど……どうしたらいいんだ？」

きよろきよろ見ていると扉の上のほうに神社の鈴を思い浮かべせるように一つの風鈴みたいなものがその姿を夕風に靡かせていた。どうやら、それが現代のチャイムのようなのだ。

それを鳴らして少々時間を要して・・・中から人が現れた。

「・・・いらつしやいませ、ちゃんと来てくれたんですね？」

「え・・・まあ、約束・・・したから」

「約束・・・か」

少しだけその“約束”という言葉に反応したのか、彼女は少々さびしそうな表情を見せたのだがいつものようなちよつと無表情な顔を見せる。

「・・・あがつていいですよ。誰もいないから気にしないでいいです」

「それじゃ、お邪魔して・・・」

一つ、扉の門をくぐると中は緑のコケに覆われたりした石やシシオドシ？を確認することができる。ここにも石灯籠らしきものがその姿を否認なしに確認させられる。他にも、大きな木があったりして・・・きつと、夏には蝉時雨が堪能できるのだらう。

「大きな家だな？」

褒めたつもりなのだが・・・

「・・・そうですか？一人暮らしをしている私としては逆に、悲しくなりますよ」

そう切り替えされて俺は彼女と共に家の中に入るまで何も言えなくなってしまうた。何か話しかけようとしても彼女と親しいわけではないので会話が思いつかなかったのだ。

家の中に入ってお茶を出され、俺は場所が場所だけに緊張しまくりだった。通されたのは彼女の部屋なのだらう・・・たんすや畳が味を出していても、今風の女の子の部屋とは思えなかった。
「・・・あの、どうですか？」

俺の視線に気がついたのかどうか、知らないが・・・彼女はそう尋ねてきた。

「ああ・・・お茶？おいしいよ？」

「よかった・・・」

ほっとしたような表情を見せる彼女に心とませながら俺は再び、居心地の悪さを感じながらどうしたものだろうかと考えた。

二人きりになっても別に話すようなことがない。会話の中では成立しやすい趣味の話をしようにも彼女の趣味などをまったく知らない。

「あ、あの・・・」

「えーと、何だ？」

話題に困っていた俺の耳に声が聞こえてくる。間違はなく、彼女は俺と何かを話したがっているのはわかるが、俺の頭の隅で「覚悟をしておいたほうがいい」と警告していたのであった。

「・・・七不思議、興味ありますか？」

「七不思議？」

夏華さんという見た目麗しの人物からでた言葉は少しばかり怪しい言葉でもあった。

「まあ、興味があるっていうか・・・よく知らないからなあ。話してくれるのか？」

「・・・勿論話させてもらいます・・・とっておきを・・・」

ちょうど、その話を聞きたいと思っていたのだ。俺は正座をして話を始めようとしている彼女のほうを見る。

「・・・これはまだ私たちの高校が女学校の頃にできた話です。だから、私たちの高校では七不思議に出てくる人物たち・・・つまり、その七不思議にはすべて女生徒が出てくるんですよ」

小ねたをそのようにいつて前置きとしたのか・・・彼女の表情が何か寒いものに変わってきた。無表情で、寂しそうな顔だった。

「・・・私が今から話す七不思議は私たちの高校の生徒会長だった人の話です。彼女は勉強ができていて先生たちからの評価も

高い人物でした。しかし、性格が災いしたのか知りませんが・・・高校三年生にもなって友達ほとんどおりませんでした。そんなある日、彼女はこんな自分ではいけないと思い・・・他校の男子生徒に思い切って話しかけました。まあ、友達を作るだけ・・・という理由だったんですけどね。そして、その行為は実を結び友達はできたのですが・・・問題はその後でした。彼女はある日、その男子生徒が彼女の性格が暗すぎると口走っていたのでした・・・結果、彼女は飛び降り・・・今でも使用されているゴミ捨て場へと落ちたのですが、不幸中の幸いでそのときは助かりました。しかし、彼女はその後・・・命日となる一週間後までずっとベッドの上で過ごしたのでした。死因はわからず、彼女のことは学校側でも問題になりました。そして、この人物の幽霊が出始めたのは一週間後・・・その日はまだ、蟬が騒がしく鳴いていた時期です。一人の少女がその事件のあったゴミ捨て場を夕方歩いていると・・・一週間前に死んだその女生徒を見たのでした。しかし、そこまでは何事もなく・・・平和でしたが事件が起こったのはその学校が共学生徒となつてからでした。その日、その少年はその怪談話を友達から聞かされようとしたのですが、その友達は途中で先生に連れられてしまったそうです。そして、少年は帰宅途中・・・大きなゴミ捨て場にて血まみれで発見されたのでした・・・その事件が以前起こった彼女の事件を連想させたのか・・・七不思議として話されるようになったのでした・・・うわさでは、彼女はその事情を知らない男子生徒に再び友達になつてもらおうとしたただけだったので・・・幽霊の機嫌を損ねたのではないかといわれています・・・」

俺は正直その話が怖いとは思わなかったが他の学校とかにある七不思議とはちよつと異彩を放っていることには気がついた。なんだか血みどろだ。

「あゝなんか、すごい話だな？」

「ええ、そうですね・・・驟雨さんはその幽霊のことをどう思いますか？」

話し手としては意見や感想が聞きたいと思うのは当然なのかもしれないな。さて、俺がその話を聞いてどう思ったか・・・

「・・・まあ、その女子生徒が不便だよなあ。理由はどうあれ、彼女は友達欲しかった・・・ただそれだけなのにな。まあ、生きてりや友達になりたかったかもな」

「・・・本当にそう思いますか？」

俺と同じ高校生・・・そう思っていた彼女が何か違うものに見えた気がした。だが、それも気のせいだと思って俺はうなずくことにした。

「・・・まあ、そりゃあ・・・夏華さんだつて友達といたほうがいいだろ？」

「・・・確かにそうですが・・・驟雨さんは相手が自分のことをどう思っているか気になりませんか？嫌われているのに上辺では友達の仮面を被っている人を友達と呼べるのでしょうか？」

だんだんと近づいてくる彼女にいくばくかの恐怖を感じながらも俺はうなずく。額を冷や汗が通過していく・・・

「・・・た、確かにそうだが・・・俺としては上辺だけ友達面をしている人たちが普通の友達で心の中で信頼し合っている家族みたいな存在・・・いや、ちよつと違うかな？まあ、信頼できる相手のことを親友っていうんじゃないのか？」

「・・・なるほど、そのような考え方もあるんですね？それでは・・・」

もはや俺と彼女の距離はほとんどない。俺が手を伸ばせば彼女の白い肌に触れてしまうことも可能な範囲だが・・・いまだに彼女から感じ取れるそれは人間のそれとはまったく違うものだった。

「・・・私は驟雨さんにとっての親友ですか？」

「それは・・・どうかな？俺はまだ夏華さんのことをあまり知らないし・・・性格はよさそうだけどな・・・まあ、とりあえずと一緒にいたら親友になれるんじゃないかな？」

男と女が親友になれるかどうかはさておき、俺にとって彼女はま

だ右手で数えられる数しかあったことがない。

「・・・そうですか・・・その、親友という言葉に別言い換えたらどのようなになりますか？」

「そうだなあ？俺だった幼馴染がいないから俺にとって親友って言ったら幼馴染ぐらい親しい奴のことじゃないかな？」

「幼馴染・・・」

俺のひざに自分の膝を乗つけて俺の胸倉を掴んでいる夏華さんに少々以上の恐怖を覚えながらも俺は時計の針を確認した。既に、午後七時を超えている。

「あゝそろそろ俺帰るよ」

「・・・もう帰るんですか？」

「ああ、俺の家、門限厳しいからさ・・・また、遊びに来させてもらうよ」

「ええ、待つてますよ・・・」

俺はかすかな明かりに照らされた瀬見津家の庭園を眺めながら・・・
・家を出たのであった。

「また来てくださいね？」

そして、ずっと俺の後姿を見ている夏華さんに・・・明かりで照らされていないはずなのにくつきりと見ることが出来る彼女をなるべく見ないように歩き始めたのであった。

そして、事件が起こったのがそれから十分後・・・街角を通る途中・・・俺の不注意か相手の不注意か知らないが・・・少しだけ田舎のここには珍しい大きな車が俺を捕らえた。

何か、強い衝撃が俺を襲い・・・次に浮遊感・・・そして、失墜していく感じを名まで体験していき・・・俺の体は地面に叩きつけられたのであった。

そして、俺の視野に映った最後の光景はこっちを見ている夏華さんの姿だった。

幼馴染

三、

目を覚ますとそこは病院の一室だった。

「・・・驟雨、大丈夫？」

隣にはあ母さんと父さんの心配そうな顔がある。

「ああ・・・大丈夫・・・」

記憶があいまいな中、俺は体を起こす。体中がかなりいたいのだが・・・動いているということはそこまで大事ではないのかもしれない。

「・・・でも、何で俺は病院にいるんだ？」

「驟雨、覚えてないの？あなたは隣の家の夏華ちゃん家から帰ってこようとしてはねられたのよ」

「無用心にも飛び出したのはお前のほうだろう？」

隣の・・・家？

「・・・？」

「お医者様は頭を強く打ったからもしかしたら記憶がないって言うていたかもしれないけど・・・覚えてないの？」

「いや、夏華さんのことは覚えてるけど・・・」

「夏華ちゃんはあなたの幼馴染でしょ？」

そう・・・だったのだろうか？俺は漠然とした不安と違和感を感しながらベッドから降りようとした。

「・・・お医者様はもう大丈夫だって言ってたけど・・・」

母さんがそこまで言う病室の扉が開いて・・・

「しゅ、驟雨君！」

夏華さんが飛び込んできた・・・俺の胸に。

「・・・！？」

「あらあら、私たちはお邪魔のかしらね？」

「そうだな、父さんたちは息子の無事を確認できたから仕事に戻る

「からな」

抱きついている彼女にかなりの疑問を抱きながら・・・俺は首をひねるばかりだった。彼女が幼馴染・・・本当にそうなのだろうか？

「・・・よかったあ・・・いきなり私が見送っている前で撥ねられましたから・・・あわてて駆け寄ったんです・・・あの、覚えてませんか？」

はねられる以前の記憶を思い出すと・・・確かに、彼女の姿があったことは確かだったと思う。だが、何かがおかしい・・・

「・・・？」

「あの、もしかして・・・私のことを忘れたとか？」

「・・・いや、覚えている・・・瀬見津夏華さんだろ？」

うなずく彼女に俺は困惑していた。

「そうです！私は驟雨君の幼馴染ですよ？」

「・・・」

余計なことは考えないほうがいいのかもしれない。第一、父さんと母さんがそういつているのだから・・・間違いはないのかもしれないし、お医者様も記憶喪失になってしまったかもしれないといっていたではないか。

その俺の表情をどうだったのか、彼女は俺の顔をじっと見始めた。
「・・・とても心配そうな顔しているけど・・・どうかしました？」

「え・・・あ・・・」

「親友の私に話してくれませんか？」

親友・・・なんだかその言葉も何かを思い出せそうな響きを持っているのだが、今の俺には無用の長物だったようで・・・わからなかった。しかし、彼女が親友だということは間違いないのかもしれない。

「・・・えーと、驚かないで聞いて欲しいんだ。実は、夏華さんとの思い出がほとんど思い出せないんだ。家に行ったことはあるんだけど・・・部屋の内部までわかるんだけどさ・・・どうにも、あんま

り記憶が安定してないみたいなんだ・・・」

おおむね、そのようなことを俺が伝える。俺だったら親友で幼馴染にそんなことを言われたらちよつとしたショックを受けるだろう。だが、彼女は笑っていた。

「・・・大丈夫です・・・あれだけの事故だったのに驟雨君が生きているんですから・・・私のことだつて覚えてるし、思い出なんてこれから作ればいいじゃないですか？」

ポジティブな考えに俺は驚く。彼女はこんなに明るい性格だったのかと・・・だが、そういう考え方のほうがいいのかもしれない。

「・・・あゝありがとう・・・」

「いえ、かまいませんよ。私たち、親友じゃないですか？ところで記憶はどの程度まで失っているんですか？」

「・・・そうだなあ、俺の記憶では・・・撥ねられる前に夏華さんの家に言つて『七不思議』の話聞いた・・・」

そこまで俺が言つと唐突に彼女が口を開く。その目は何をとられているのだから・・・どこも見ていないようにも見える。

「・・・それ、違いますよ？私たちの高校の不思議は七つまでありませんけど？」

「え、そうなのか？」

「ええ、他の方に聞いても事実が変わりません・・・ということはそこらへんから記憶がいまいになつているみたいですね？」

「うゝん、そうみたいだなあ・・・学校のことはある程度まで覚えてるんだけど・・・」

「他に、私のことでわからないことを言つてください」

「夏華さんのことでわからないこと・・・？そうだなあ、なんだか名前以外ほとんど忘れたような・・・」

俺はそういつて考え込んだ。何か思い出すことができないだろうかと悩んだのだが・・・出てくるものは一向に疑問符だけだった。

「・・・それなら、また自己紹介をさせてもらいますね？」

「ああ、そうしてくれるとうれしいよ」

「・・・私の名前は瀬見津夏華・・・神塚高校二年生で驟雨君の隣のクラスです。趣味はぬいぐるみを作ることと読書・・・嫌いなものは約束を破ること・・・こんなものでいいですか？」

「ああ、充分だ」

何故だかはじめて知ったようなことなのだが・・・記憶を失っているからかもしれない。いずれ、なくした記憶も元に戻るかもしれない。

彼女とはその後談笑してわかれ、俺は医者からの簡単な診察を受けた。既に、異常ないそうで明日からは普通に学校に登校して結構だといわれたのだった。

「よつ、撥ねられたと聞いたときは正直、ヒヤツとしたぜ？」

「まあ、心配かけたな」

そこには少々不思議現象が好きな俺の友達が待っていた。

「・・・なんでも、瀬見津さんがずっと看病してくれていたそうじゃないか？うらやましいなあ・・・」

「そうなのか・・・ぜんぜん知らなかった・・・それより、ちよつと聞きたいことがあるんだが・・・その夏華さんのことをぜんぜん覚えていないんだ」

俺がそういうと奴は驚いたような顔をしていた。

「覚えていないだって？まったく、お前は瀬見津さんの幼馴染だろう？ここは空気を読んで『俺は夏華との愛があったから生き返れたんだ』とかそういうことを言えればいいのにな・・・」

「まあ、それはいいとして・・・とりあえず、教えてくれないか？」

あれから一向に彼女のことを思い出せない。

「・・・しょうがないなあ、お前と瀬見津さんは幼馴染・・・それはわかっているな？よし、それでその幼馴染ぶりはすごかったぞ？幼稚園、小学校、中学校、高校・・・までずっと一緒にいるからな。帰るときも一緒だし、今じゃ、一週間に何度かはお前の家に住んでいるそうだけど？」

「・・・そうだったのか・・・」

「それでなあ、一番有名な話は『約束を守った瀬見津』っていう奴だな・・・」

その話には俺は当然のように食いついた。

「・・・どういう話だ？聞かせてくれ！」

「・・・おいおい、そう噛み付くなよ・・・簡単にまとめると・・・去年の夏・・・そうだな、あの日はよく蝉が鳴いていた。そのときに瀬見津さんが・・・確か、屋上から貧血で落ちそうになったんだ。それを、お前が必死で止めた・・・それで、逆にお前がそのまま落ちたんだ」

そうだったのか・・・よく、この屋上から落ちて死ななかったものだ。この高校は五階建てだろう？

「・・・その後からがすごかったんだなあ・・・まあ、去年の夏からだっただけだな・・・ずっと、お前の隣には瀬見津さんがいるぜ？」

「そうだったのか・・・そこまで深い仲だったとは・・・」

そこまで俺が言うとなんは

「しかし・・・」といったのだった。

「・・・俺からみればものすごいカップルとしか見えないんだが周囲の目は間違いなくお前たち二人を

「親友同士」としか見てない気がする・・・そうだな、この世で一番仲がいい友達の見本だつて言われてるぐらいだからな」

「まるで運命共同体だな」

「ま、そんなもんだろうよ・・・ほら、瀬見津さんがきたぞ？」

後ろの扉のほうからは夏華さんが手を振っている。

「いつてやれよ」

「ああ、いつてくる」

俺はそういい残して彼女に会いに行った。しかしながら、ずっと隣にいる女の子をいまだに彼女にできていない俺は奥手なのだろうか？ずっと一緒にいればさすがに・・・彼女と彼氏の関係になっ

る思うのだが・・・

「夏華さん、どうしたんだ？」

「え・・・いや、体調はどうかなあと思ってきたんです」

うん、俺のことを心配してくれていたのか・・・本当に心配そうな顔をしているなあ。

「・・・ああ、元気だが・・・友達とかから夏華さんとの話を聞いたりしたんだが、ぜんぜん思い出せないんだ。ごめんな」

「かまいませんよ。前にも言ったじゃないですか・・・これから思いでは作ればいいって・・・あ、そうだ・・・驟雨君が私のことを思い出したいのなら今日の昼休み、図書館に来てくれませんか？」

それは願ってもないチャンスだ。彼女のことを知ろうとしている俺にとっては渡りに船だ。

「わかった」

昼休み、俺は授業がすぐに終わるとそのまま弁当を広げずに図書館へと向かった。外から回ったほうが若干の近道になるので俺は図書館の近くを通って・・・

「・・・？」

何かしらの違和感を覚えた。辺りにあるものは大きなゴミ捨て場・・・それだけだ。ここが彼女の変わりに俺が落ちた場所なのだろう・・・それを思い出しているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6041c/>

中身の入った蝉の脱殻

2010年10月8日15時21分発行